

---

# 煌めきLIFE

彩輔

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

煌めきLIFE

### 【Nコード】

N34770

### 【作者名】

彩輔

### 【あらすじ】

人の誰もが通る15歳。

有り得ない事が起こる街、変な友達、自我って何だ？

自分の事をあまり信じられない翔という少年を取り巻くお話

その15歳の彼が自分の1番大切な何かを捜すお話です。

## 1 何でも有り？（前書き）

現実味があるか無いかかどうかは、読んでいただいてからの楽しみです！！

ゆっくりしてってください。

## 1 何でも有り？

### - プロローグ -

此処は日本のはず。  
とある綺麗な街。

年齢層…… 15歳

そう。この街は15歳の人達しか入ることのできない街。

そんな街で繰り広げられる15歳達の生活。

一つ言っておこう。

この街は何でも有りだ。

……何でも。

## 1 何でも有り？

いつものように俺は普通の街を歩いていた。青信号に変わり終いには赤信号に変わる。その光景を少年はボーッと見ていた。

その少年、小柴翔 コシバカゲル

年齢 14歳

趣味 読書、ゲームを作る

性格 よく替えるが基本、暗い

今彼の服装はいたってラフな感じで、耳にヘッドフォンを着け、聴いている音楽は自分で作った物語りのテーマソング。

そんな翔が『何でも有りの街：行きませんか？』と、いう不思議な本を読んでいた。

「何でも有りの街…か」

間もなく翔は15歳になる。

あと1週間で誕生日を迎え、翔は何でも有りの街への切符を与えられる。

「15歳だけが居る街、何でも有り、お金は………いらない」

ブツブツと呟きながら、翔は青信号に変わった横断歩道を渡っていく。

鳥が鳴き始め、そろそろ日が暮れようとしていた。

翔も大人達の帰宅ラッシュにのまれつつも駅に向かっていた。

「あと、1週間…ねえ」

ガタン…ゴトン

ガタン…ゴトン

翔は『汐蘭駅<sup>シラン</sup>』まで、地下鉄に揺られ帰宅する。

汐蘭駅まであと3つもある。

この時の翔の気持ちは一言で言えば、「長い…」と知っていることだろう。

人は楽しみができるほとんどの人が何事も遅く感じるのであるのだから……

『黒覇駅<sup>クレハ</sup>』黒覇駅へ。お降りの方は電車が止まりましたら段差に気をつけてお降りください』

電車でのアナウンスも彼にはBGMに聞こえた。

「何でも有りか。どうなってるんだろうな、その街」

翔の頭の中では本の事しか無くなっていた。  
その意欲こそがそのイカれた街への切符である。

『汐蘭駅→汐蘭駅……』

「…降りるか」

涼しい顔をして翔はその電車を降りて行った。  
しかし彼はその電車の中に大事な者を忘れていった……

その忘れ者とは『自我』と、いう人類にとって大切な物を忘れて行った。

## 2 いつもの事さ（前書き）

新しい翔のお友達が出てきます



## 2 いつもの事さ

汐蘭駅を出た翔は人込みの流れに乗り駅の改札まで運ばれた。

「うむ、着いたな」

着いた時は既に欠けた月が顔を出していた。

この街：翔が住む街、煌川<sup>キカワ</sup>街の夜は、電灯の光りが少なく自然な月の光りが零れる今の言葉で言えばE C Oな街。

『おっ！！！翔君、お帰りなさい。もう月が出て来たから、早く家に帰ると良い』

「はい」

駅長の小暮さんに、お帰りなさいと言ってもらうのはいつもの挨拶みたいなものである。

その挨拶を翔は快く思っている、嬉しい気持ちを顔には出さず無表情で話すのもいつもの事である。

ガチャン…

駅の無料駐輪場に止めてある自転車の鍵を外し、ゆっくりとこぎ出す。

「さて、帰りますかな。家に着く間にどのくらいのアイディアが湧くだろう?」

自転車をこぎ始めた翔の頭に冷たい雫が当たった。

「おわっ！！！雨かよ」

翔のリュックから小さいプラモデルに見える傘を取り出した。この小さい傘は雨に濡れたら拡大する“ミニカッター君”である。

「ミ、ミニカッター君って…何だよ。まあ使っただけだよ」

雨の雫で原寸大になりバサツと音を立て見事な傘になった。あちこちで雨の雫を利用している、本当にECOな街だ。

『翔？こんな所で立ち止まってカッター君開くなんて、通行人の邪魔だよ？』

「……………すまん」

駅前でカッター君を濡らそうと頑張っていた翔の背中に話しかけてきたのは、同じ中学でクラスも同じの男友達、キナ毅那タツキ竜鬼

年齢 14歳

趣味 翔のゲームをPlayする事

性格 真面目、翔と正反対の明るさを持つ

頭からフードを被り、コンビニ袋を右手に提げて、左手にはカッター君をさしていた。

『そういえば、この間貸してくれたゲームあるだろ？あのラスボス

最高だったぜ!!」

「ああ…当然だ。俺の作るゲームはラスボスに命入れてるからな!」

竜鬼の意見を聞いた翔は嬉しそうに笑い、「今作ってるやつはな…」と話し出した。

翔と竜鬼の家は路地を挟んでいるだけだから近所同然

新しいゲームの話をしながら2人は一緒に帰って行った。

### 3 1週間の普通の日（前書き）

やがてやってくる自分の誕生日（入街日）。それは嬉しいですか？  
それとも…

### 3 1週間の普通の日

『さ、俺の家に着いたぞ』

「竜鬼の家に着いてどうするんだよ、俺は自分の家に帰るんです。」

『えっ！！新しいゲーム無いの？翔にしちゃ珍しい』

いつもと同じ路地の分かれ道、交差してる道の真ん中に立ち止まって話をしている。

雨がしだいに弱くなってきたので2人はカッサー君を元に戻しポケットの中に入れた。

此処でカッサー君を元に戻す方法を教えます。

1・傘の先端についているボタンを押す

2・ただ先端を乾燥させる

以上。

「まっ今日は帰るよ」

『ん、じゃーな』

手を降る竜鬼に微笑み返しながら自転車をこぎ始める翔の顔はやは

り無表情に等しい。

いつもならペダルをこぐ時に笑顔で「じゃーな、竜鬼」と言つのに

……

やはり『あれ』を亡くしたせいなのでしょう。

「なんだろう…何か、大切な物を何処かに忘れた気がする…、ん？  
大切な物ってなんだっけ」

そう、このとある 忘却 をも無くなる世界も有るのだ。  
何でも有りの街への切符は徐々に手にし始めている…。

- 次の日 -

翔の15歳まであと6日…

誕生日7月18日。今現在、7月12日、午前6：30。  
朝起きるのが早い。いや、これが普通なのかも知れない。

「……あーあ、昨日新作をちゃんと完璧にしとくべきだった！！3  
0分も寝てしまった！！」

翔の朝はどつやらもつ少し早いらしい。

ガタッ…

ブウンー！！（P Cの電源ON）

「な、何い！！待受画面にこんなの使ってねえぞ！！」

待受画面に映っていたのは、

『只今、7 / 1 2    6 : 3 6 : 5 2    入街まであと6日』

と、大きくカウントダウンのF l u s h画像の待受に変わっていたのである。

もちろん、翔は何の事かさっぱり分らない…

気付こうとしていない。何せ、あの本を最後まで読んでしまったから…

あの本の最後…

そのページ…頁……

まだ、見てはいけない。そんな気を起こす頁だ。

#### 4 本の言う事（前書き）

本の意味。読んではいけない本かもしれない…なのに1番最初に翔に読ませてしまった。

この話で結構重要な所かもしれませんが



#### 4 本の言う事

あの本は最後まで読んではいけない -。

『何でも有りの街…行ってみませんか』

お教えしましょう。

あの本の最後には『タスケテ』の文字。後は空白の頁が5枚続く…  
タスケテの意味を理解した者、理解できない者…結果は同じである  
が理解した者の方が覚悟が早く決まる。

書店に何故 無料配布 で並べられているのかも不明…

それを手にするのは14歳だけ。あの街に行く方法は書いていない  
のに行ってしまう。

一気に15歳が消えるのに、テレビ画面にも映りはしない。

家族も騒ぎやしない。

この世界では何も変わらない。だって行ってしまったら、何でも有  
りなんですから。

そしてある一文にはこう書かれている…

『何でも有りの街に行った人の中で、自分を持ち続ける事のできた  
人間は1年間の修業を終え戻る事ができる』

一文にたいした意味など無い。

でも少しの 恐怖 は覚える。戻る事ができない人はどうなる、1  
年修業に耐えるのか、そもそも何処にそんな街が有るのか。

しかし翔は最後の『タスケテ』を読んでしまった。  
本を最後まで読む事が大切だと思っている翔はもちろん空白の頁も  
しっかりと見た。

理解したのか、理解してないのかは分からない。

分かった、と答を出すのはあの本なのだ。

この本は一人で作られたのでは無い。行ってしまった15歳の書く  
メッセージ。

本の中の人は故にこう伝えた -。

こちら側には来てはいけない。

読んではいけない。

少しでも興味を抱いてはいけない。

ここで皆さんに答う。

本は何処まで読みますか？

最後まで読みますか？

本編が終わればお終いですか？

## 5 カウントダウン？（前書き）

だんだん明らかになってくる翔を取り巻く状況。  
家の構造が出てきます。

## 5 カウントダウン？

「…つたく、なんなんだよ」

翔の机の上にある変わってしまったPC画面を元の真っ黒の画面に戻そうと健闘したが…

あいにく、そのFlash画像は消えなかった……。-

「取説見なきゃ駄目系か、これ？めんどくせーなあ」

朝日が強く窓を叩き、そろそろ人が活発に動く時がやって来た。間もなく7時を迎える。

ピーピーピー…

ピーピーピーピー…

翔が目覚まし時計がなっているのでは無く、下で寝ている母と父の共同目覚ましがなっているのである。

翔の家は三回建ての一軒家。

1階にリビング&キッチン、父母の寝室（和室）風呂等。

2階は翔の空間。部屋を出たら、横に並ぶタンス出て来てその廊下を歩いた先にトイレがある。構造的におかしいのだが…

3階に上がる階段はトイレの前にある。

3階は主に物置部屋となっている、言わば屋根裏部屋。

「またこんな時間に鳴らしてるよ。起きねーくせに」

ピーピーピーピー…  
ピーピーピッ！！

「ん？止まった。起きたのか」

翔は珍しそうな顔をしながら部屋の沢山あるタンスの中からヘッドフォンを取り出し、PC画面を直す為、取説を読んでいた。

下の階でガチャガチャ音を立てて食器を出したり、ウィナーを焼く音が響いたりしている。ごく普通でありふれた音、そんな音を翔はヘッドフォンという音楽再生機で両断してしまう。

「あつ、スタートボタンじゃねえのか…んで、その後ファイルを開きつつ………」

机の上には広がった数学のノート、国語の古典、シャープペンが転がっている。

『翔ーっ、起きてるなら下に来て目玉焼き焼いてー!!』

下の階段に少し足を置き翔の部屋に1段近づいた状態の母が、言ってきた。

「……………。わかった、すぐ行くから待ってて。」

下にいる母、聴いている音楽の音量に負けないように叫んだ。  
翔の1週間はこうして始まる。普通であれば。

翔はヘッドフォン、PCを閉じて部屋を出て行った。

ピーピーピー……  
プップップップ……

目覚まし時計では無い音が鳴り出す。閉じたはずのPCから。まだ画面のFlush画像は消えてはいない。

そう、誕生日まで続くでしょう。

切符を手に入れるのは、  
いつだろう。

## 6 目玉焼き

下に降りるとまず、エプロンを巻いているかのような母親が視界に映った。

「本当にこんな時間に起きてるのねー。母さんビックリしちゃったわよ、ハッハッハッ」

『ああ。…んで、卵はこの冷蔵庫？それとも、あっち？』

翔の家には冷蔵庫が二つある。何故かは母に聞いてくれ。

「手伝ってくれるの？ありがとう、んじゃ翔は…」

『下に降りてこいっつったの誰だよ』と、思いつつ母に従ってあげた。

母の指令によると、卵は右の冷蔵庫にあるらしい。それを4個割って目玉焼きを作れというのだ。目玉焼きは半熟か固めか…それは言

われなかった。

『半熟、固めどっち？』

「んじゃーねえ。母さんは半熟、父さんは固めで。翔は翔の好きな方で良いよ。あつ、慄の分忘れてた！！！」

慄リッと言うのは、小柴 慄。年齢 11歳

趣味 人間観察

性格 不明ってか訳解らん

翔の妹にあたる存在である。慄の性格は親でもよく解らない。掴みにくい性格をしているのだ、故に友達もそついうのしかできない。ある意味面倒な奴だ。

『慄は半熟でいいんじゃねえかなあ？』

「そつ、なら半熟ね。よろしくつ！！！」

母は若干どうでも良いような雰囲気を出し、自分の作っていた味噌汁の元へと小走りした。

「俺、どっすかなあー」



今考えるば目玉焼きで悩む等、平和すぎた。

## 7 視界

ジュージュー…  
ジュッ！！！！

目玉焼きが焦げた。

「あーっ！！！！って思ったけど、ナイス焦げ 流石、翔っ」

『…………。嬉しくない』

「父さんは苦いのしか食べないし、調度良いじゃない」

父。小柴 マッオヒ 松帯

年齢 44歳

仕事 宅配会社社長

性格 もんの凄い真面目

母。小柴 ミユウ 美悠

年齢 40歳

趣味 料理、マラソン

性格 明るい、まさに太陽だ

ここで自己紹介したのは、父が今やつと起きたからである。  
慄はいつ起きるか解らないからさつき自己紹介を行った。

「おはよう。ん、翔か。何やってんだ」

父のこの喋り方は何処でも変わらない。

何故だか爺ちゃんによく似ている。家族はそこまで似るものなのか。

「あら、父さん。おはよう！……今日は翔の目玉焼きよ！……早起きして作ってもらったのよー」

『ん？早起き？』と、思いつつもあえて口に出さなかった。

父さんは寝起きでヨタヨタと歩きながら洗面所に歩みを進めた。父さんが洗面所に行く途中で立ち止まり、翔に「おはよう」と言った。

『おはよう』

翔にしては珍しくちゃんと目をみて挨拶をした。

その間にも、目玉焼きは焦げていく。

ジュツ！！！！

焦げた。

『またか：仕方ない。俺のにしよつと』

今翔の右瞳に写るのは、焦げた目玉焼き2個。

何故右瞳なのかな？

左瞳には何が映っていると思いますか？

自分、私達の瞳に映る景色は常に偽造である。

それは自分の能が作り出した幻覚。その幻覚が連なって視界となる。常にそれぞれ皆は、偽造の視界の中で生きている。

貴方の瞳に映るのも、偽造の世界が作り出したただの幸せを装った、悲しき視界にすぎない。

翔の左瞳に映るは……

現実という名の恐怖。

## 8 戦慄を奏でよ

翔の左瞳に映ったのは、割れた皿、血の紅に染まった床。  
右瞳と左瞳が映し出す、虚と実の視界。

どちらが本物か？

そんなもん知ったこっちゃない。ただ解る事は、だんだんあちら側に翔が招かれている事。

もしかしたら15歳になる前に、行ってしまうかもしれない。

『なんだ…こ、これ』

「翔ーっ？どうしたの？なんか震えてるけど…」

ふと我が身に帰ると、翔の顔を心配そうに見る母の姿が映る。母は焦げた目玉焼きをテーブルの上に置きながら言った。

「もう少し寝てきなさい。翔、無理してたんじゃないの？」

『別に無理なんか…』

「あつ、兄」

翔が『大丈夫だよ』と、言いかけた所に慄がはだけたパジャマのまま歩いて来た。

「なんかさー震えてない？大丈夫かい、兄。」

『寒いだけだろ』

「夏なのに？」

『風邪でもひいたのかもな』

「へえ」

慄は「へえ」と、言ってから左にある冷蔵庫の中から牛乳を取り出してコップを使わずにそのまま飲んだ。豪快に。

「あらら、また慄こんな飲み方してー」

「美味い」

母が問いかけるのも虚しく、慄は美味いと言いながら牛乳を1本飲み干した。

「慄ーっ、牛乳買ってきてー」

母は笑いながら、ゲップをしそうな慄の背中を叩き言った。

「ああ。解った」

慄は急に態度と低い声に変わった。これこそ、訳解らん性格の正体だ。

変化後の慄は母からお金を受け取ると高速で着替えて近くにあるスーパーに出掛けて行った。

『んじゃ、俺自分の部屋行くわ。適当に食べてて。』

翔は母にそう言つと降りて来た階段を昇り、自分の部屋へと向かった。

左瞳に映ったあの血の色。  
紅<sup>くれない</sup>

その色が頭から離れないまま -。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3477o/>

---

煌めきLIFE

2010年11月14日02時47分発行